

教科「情報」におけるウェブページの作成

柏市立柏高等学校
滑川 敬章

1. はじめに

教科「情報」の授業の中で、ウェブページの作成を行っている学校は多いことと思います。ところが、いまやウェブページ作成ソフトを使ってウェブページをつくることは、中学校や小学校でも行われています。もちろん、小中学校に比べれば、高校の「情報」での内容は少し進んだものになるのかもしれませんが、「情報」の授業で行うウェブページの作成が、単なるウェブページの作成で終わってしまっているはずがありません。

今回、このような機会を頂きましたので、ウェブページの作成に関する授業について、私見や事例をいくつか紹介させて頂こうと思います。

2. 「情報」で行うウェブページ作成実習の 目指すもの

(1) ウェブページを作成する理由

ウェブページを作成する機会は以前に比べてだいぶ増えたのではないかと思います。また、ホームページ・ビルダーなどの作成ソフトを使うことにより、Wordなどのワープロソフトを使える生徒であれば、さほど苦勞せずにウェブページを作ることができるようになりました。中学校では、総合的な学習の時間で、自分たちの調べたことを発表するための手段としてウェブページの作成を行ったりしている学校もあります。このような場面では、ウェブページの作成技術を身につけるといよりは、情報を調べたり、まとめたりする過程や、情報を発信すること自体を目的としており、高校の「情報」で教える内容とは趣旨が異なっているとは思いますが、単につくるだけなら誰でもできるようになってきています。

このような状況や、現在の生徒が中学校までに習得してくるリテラシーを考えたとき、「情報」で本来教えるべきことや、高校でのウェブページ作成実習で目指すべきことは何でしょうか。

(2) 授業からの反省

このようなことを考えるきっかけになったのは、情報の授業が始まった最初の年、ホームページ・ビルダーを使ってウェブページ作成の授業を行ったときでした。その授業はチームティーチングで行っていて、私は机間指導で生徒の質問を受けてまわりました。そのときに生徒から出てきた質問は、

- ・「この画像をもうちょっと右にしたいんだけど、どうすればできますか」
- ・「背景に画像を入れるにはどうしたらよいですか」
- ・「こういうフォントを使いたいんだけど、どうすればよいですか」

など、見た目のデザインやレイアウトに関することがほとんどでした。

ある生徒はホームページ・ビルダーの作成画面上で、一生懸命に全角スペースを入れて画像の位置を調整していましたが、そのようなことをしても、ブラウザで表示させたときの表示幅が変わってしまえば無意味だということに気づくことはできませんでした。また、ある生徒は、文字もすべてロゴで画像として作成し、背景もリンクもすべて画像でできているページを作っていました。

このようなことは、生徒の興味・関心からすればあたりまえなのかもしれませんが、ウェブページの作成について教えるべき内容を考えさせられると共に、生徒と私との間の視点の違いを感じました。

(3) ウェブページ作成を通して何を教えるか

最初の授業での反省から、「情報」の授業では、ウェブページ作成ソフトの使い方や、HTMLの細かい文法的なことよりは、ウェブページについての本質的なことや基本的なことを中心に授業を展開することとしました。具体的には、情報を共有・発信するための方法としてのウェブページの

在り方や、そのための知識や技術です。情報を共有・発信するための基本的な考え方や知識があれば、ウェブページを作成するための技術の習得は容易であると考えからず。

もちろん、ウェブページ作成に必要な、文字コード、ファイル名の命名規則、パス名や階層ディレクトリに関すること、URLやインターネットに関連する知識、画像の処理方法などについても、事前に、もしくは同時に指導します。その他、情報発信の際に必要な、著作権・肖像権・プライバシーについてや、情報発信に伴う責任などについても同様です。

(4) ウェブページ作成にかけられる時間

もう一つ考えたのは授業時間のことです。ウェブページの作成を行うと、それなりに授業時間をさかなければなりません。しかしながら、2単位の情報の授業では、ウェブページの作成にかけられる時間はそう多くありません。例えば、数研出版の教科書の場合、情報Aでは、第4編第2章の「C WWWを使った情報の発信(1ページ)において2時間扱い、情報Cでは、第2編第3章の「C WWWを使った情報発信(5ページ)において、2.5時間扱いとなっています(いずれも数研出版の学習指導計画案による)。限られた時間の中で、「情報」の授業で伝えるべき内容は何であるかを整理する必要があります。

3. ウェブページ作成を通して教えたいこと

教えるべき内容や授業時間を考慮して、次のようなことを中心に授業を組み立てることとし、ウェブページの内容やデザインなどはあまり扱わないこととしました。

- (1) 紙に印刷された文書と電子化された文書との性質や特性の違い
- (2) マークアップ言語の本質
- (3) アクセシビリティへの配慮

(1) 紙に印刷された文書と電子化された文書との性質や特性の違い

ウェブページなどの電子文書は、単に文字情報を電子化しただけではそのメリットは半減してしまいます。電子化した文書には「検索」、「置換」、

「集計」など様々なメリットが生まれてきますが、そのメリットを生かすためにも、文書をそのまま電子文書化するだけでなく、有効な電子文書情報にするための工夫が必要です。例えば、以下のようなことです。

- ・特殊な文字を使わない
機種依存文字や半角カタカナなど、情報を共有する上で問題になりそうな文字を使わない。
- ・英数字や記号の表記の統一
英数字や記号は半角文字で書くようにする。コンピュータでは半角文字と全角文字(1バイト文字と2バイト文字)は全く異なる文字として扱われるということを認識させる。そうしないと、検索や置換を行うことが困難になる。
- ・言葉の揺らぎ
後で検索することを考えて、用語の使い方を統一する。「コンピュータ」と「コンピューター」、「使用願」と「使用願い」や、「HTML(半角英字)」と「HTML(全角英字)」のように表記の揺らぎに配慮する。

このようなことは、長くコンピュータを使っている人からはあたりまえのことかもしれませんが、生徒はあまり意識していないことのようにです。

(2) マークアップ言語の本質

HTMLの構造や仕組みを学ばせるために、ウェブページ作成ソフトを使わずに、エディタでタグを入力して作成させることも多いと思います。それはそれで意味があると思いますが、しかし、私はそれだけでは不十分であると思っています。

例えば、`<h1> ~ </h1>`は1番上位の見出しに付けるんだよ、とか、`<p> ~ </p>`は段落だよ、とかそういったことを指導されることは多いと思いますが、どうして文書の中に、見出しや段落が必要なのか、という部分についてふれていることは少ないのではないのでしょうか。ウェブページを作るためにタグを書いているだけでなく、なぜ、タグを使って記述しているのかを理解しなければ、本当の意味でHTML文書を書けるようにはならないと思うからです。

- (a) テキストファイルかバイナリファイルか
情報を共有するためには、受信者の環境に依存

せず、どのようなコンピュータやOSでも読めるということは大切なことです。そのためには、特殊な形式で情報を保存しないほうがよいわけです。しかし、ワープロソフトなどは、文字情報だけでなく文書の書式や文字の装飾などの情報を一緒にバイナリファイルとして保存しているので、そのソフトがないと読むことはできず、情報の共有には向きません。

テキストファイルは文字だけの情報を記録したもので、いろいろなコンピュータやOSで読むことができ、情報の共有に向いています。しかし、テキストファイルで保存できるのは文字情報だけなので、文書の書式や文字装飾などの情報を表すことができません。そこで、特定の文字列を記号として挿入することで可読性を犠牲にしないで、文字以外の付加情報を記録する方法をとります。ウェブページ(HTML文書)はまさにこの方法です。ウェブページがテキストファイルで書かれているということには、このような意味もあるということを考えさせたいです。

(b) 文書の構造と構成要素

文書を後で効率よく利用するためには、文書の構造や構成要素がきちんと分かるように電子化しなければなりません。文書とは単に文字が並んでいるだけのものではなく、1つの文書はタイトルや見出し、段落などの要素をもち、文書としての構造をもっています。

本などの印刷物の場合、見出しや段落などは、文字のデザインやレイアウトによって表すことができます。人間は視覚情報から経験的にそれらの意味を理解することができます。ブラウザに表示されたウェブページの場合も同様に、人間は表示された文字のデザインやレイアウトによって見出しや段落などの情報を得ることができます。

しかし、ウェブページはサーチエンジンのロボットや視覚障害がある人が使う読み上げソフト等からも利用されます。これらのソフトウェアが文字のデザインやレイアウトの情報からその意味を正しく解釈することは難しいことです。そのため、見出しや段落などの文書の構造や構成要素をソフトウェアでもわかるように示してやる必要があります。

例えば、「情報の収集と発信」に関する図1のような文章があったとします。

C WWWを使った情報発信 ウェブページによる情報の発信 情報を発信する相手を限定せず、情報を発信する場合には、放送型の情報サービスであるWWWが有効な方法になる。WWWを使って情報を発信するには、まず自分でウェブページを作成することと、それを発信できるコンピュータが必要になる。

図1 構造のない文章

この文章を本などの紙媒体で分かりやすいように、フォントやフォントサイズ、インデントなどを変更して表現すると次の図2のようになります。

C WWWを使った情報発信
ウェブページによる情報の発信
情報を発信する相手を限定せず、情報を発信する場合には、放送型の情報サービスであるWWWが有効な方法になる。
WWWを使って情報を発信するには、まず自分でウェブページを作成することと、それを発信できるコンピュータが必要になる。

図2 フォントやレイアウトで構造を表した文書

しかしながら、電子文書では、このような文書の構造や構成要素を、フォントやフォントサイズで表現することは適切ではありません。そこで、情報を共有・発信するのに向いているテキストファイルの中で、これらの構造や構成要素を表現するために、マークアップを行うことになるわけです(図3)。

```
<title>情報の収集と発信</title>
<h1>C WWWを使った情報発信</h1>
<h2>ウェブページによる情報の発信</h2>
<p>情報を発信する相手を限定せず、情報を発信する場合には、放送型の情報サービスであるWWWが有効な方法になる。</p>
<p>WWWを使って情報を発信するには、まず自分でウェブページを作成することと、それを発信できるコンピュータが必要になる。</p>
```

図3 マークアップで構造を表した文書

この例のように、最上位の見出しは、h1要素として、段落はp要素として、タイトルはtitle要素としてマークアップすることにより、テキスト

ファイルであるというメリットを残しながら、文書の構造や構成要素を表現するという部分が大切だと考えています。

(3) アクセシビリティへの配慮

WWWの最も重要な長所の一つとしてアクセシビリティがあげられます。アクセシビリティとは、どの程度広い範囲の人に利用可能であるかをあらわす言葉です。特に、高齢者や障害者など行動が制限される人にとって、ウェブページは非常に利用価値の高いものです。

1999年5月にW3Cから、ウェブコンテンツ・アクセシビリティ・ガイドライン1.0が勧告されましたが、あまりアクセシビリティの概念が普及しているとも思えません。その一方で、ウェブページは一部の専門家のものから、我々の生活になくはならないものになってきています。特に、e-Japan重点計画に基づき、電子政府や電子自治体が推進されていることを考えると、このアクセシビリティの問題はもっと身近にとらえ、情報の授業で扱っていくべきであると思います。

このような背景からか、2004年6月に、Webアクセシビリティを規定した日本工業規格(JIS)が交付されました(JIS X 8341-3)。この中では、高齢者や障害者がWebコンテンツの情報アクセシビリティを確保、向上させるために、規格、設計、開発、保守および運用などについて配慮すべき事項が規定されています。WebコンテンツのアクセシビリティがJIS化されたことは非常に意味があることだと思います。JIS化された後に、自治体のウェブページなどではアクセシビリティがだいぶ改善されました。例えば、多くの自治体のウェブページで、「文字を大きくするには」といったリンクがトップページに書かれるようになったことは、このJIS化の影響だと思えます。

ウェブページは視覚的なメディアとしての印象が強いですが、それだけでなく、音声や点字による利用者がいることを忘れないようにすべきです。

人に対してではないのですが、検索エンジンのロボットにもアクセシビリティは間接的に関係します。検索エンジンに効率良く検索されるようなサイトを作るためにも、アクセシビリティは重要な意味をもちます。

1. 聴覚や視覚によるコンテンツには、同等の動きや趣旨の手段を用意する
2. 色だけに依存した表現をしない
3. マークアップとスタイルシートを適切に使用する
4. 使用している自然言語を明らかにする
5. テーブルはアクセシブルに変換されるように記述する
6. 新しい技術を利用したページは、うまく変換されるようにする
7. 動いたり点滅したりするなど、時間とともに変化する内容についてはユーザーが制御できるようにする
8. ページ中に組み込まれたユーザーインターフェイスはアクセシブルなものにする
9. 入力デバイスに依存しないように設計する
10. 暫定的な解決策を用意する
11. W3Cの技術と指針を利用する
12. 前後関係や文脈を表す情報を提供する
13. 分かりやすいナビゲーションの機能を提供する
14. 文書は明瞭で簡潔なものにする

図4 アクセシビリティ・ガイドライン14の指針(筆者訳)

4. アクセシビリティについての授業実践例

アクセシビリティに関することは、ただ話をしても生徒にはなかなか実感してもらえません。そのため、私が行っている事例をいくつか紹介します。

(1) 直感的にアクセシビリティ、ユーザビリティの差を感じさせる

総合的な学習の時間の中で、「情報の受信者を考えたウェブページを作ろう」というタイトルで以下のような授業を行いました。地元の手賀沼マラソンのウェブページ作成を通して、情報発信の責任や、情報へのアクセシビリティやユーザビリティについて考えよう、という授業の中で、昨年度(2004年)に1時間で行ったものです。

導入として、次のような演習を行いました。判断する基準もくわしく提示せず、非常に直感的な判断になってしまいますが、アクセシビリティやユーザビリティが感覚的に理解できればよいと考え、直感的に判断して順位をつけるように指示しました。

【演習】

自治体のウェブページから以下の情報を調べて、調べやすかった順に、順位をつけてみよう。

対象：千葉県、東京都、神奈川県、埼玉県、茨城県
調べてみること：

1. 県(都)庁への行き方
2. エイズの検査をしてもらえるところ
3. 県(都)の特産品は何か

順位をつける規準：

- ・すぐに見つけられたか？
- ・わかりやすい情報だったか？

生徒に調査してもらった結果を集計すると以下のようにになりました。直感的に順位をつけているので、生徒毎に多少順位の付け方が違いますが、一番人数の多いところを、その県の総合的な順位としました。

県・都	1位	2位	3位	4位	5位	総合順位
千葉	1	3	9	5	1	3位
東京	4	10	2	1	2	2位
神奈川	14	4	1	0	0	1位
埼玉	0	1	3	3	12	5位
茨城	0	1	4	10	4	4位

図5 生徒が調査した調べやすさの順位

この結果を、日経BPコンサルティングが2004年2月に実施した「自治体サイト・アクセシビリティランキング」*1の結果と比較してみました(図6)。きちんとした審査項目や配点がある調査と、簡単で直感的な調査を比較するには無理があると思いますが、比較してみるとおおむね相関関係はありそうです。

	アクセシビリティ ランキング	生徒の順位
東京都	2位	2位
神奈川県	6位	1位
千葉県	15位	3位
埼玉県	20位	5位
茨城県	25位	4位

図6 アクセシビリティランキングと生徒の調査結果との比較

*1) この調査は、47都道府県を対象に、サイトの基本構造、基本的な操作性、画像・動画・音声などの扱い、文字の表現やデザイン、トップページの使いやすさの5分野、57項目について100点満点で評価したものである。(以下を参照) 日経BPガバメントテクノロジー・電子自治体ポータル JIS制定直前緊急調査 自治体サイト・アクセシビリティランキング

<http://premium.nikkeibp.co.jp/e-gov/special/2004/sp040324c1.shtml>

授業後に、生徒は感想を以下のように書いています。ウェブページの使いやすさなどについての意識が変化した様子が分かります。

ランキングをつけてみた生徒の感想(一部)

- ・意外に県によってレベルが違うのがわかった。
- ・神奈川県がとても見やすかったのが印象に残った。
- ・ランキングは、神奈川県が圧倒的に1位で、本当に見やすかった。
- ・素人目で見てこんな違いがわかるとは思わなかった。
- ・埼玉県は最悪だった。
- ・県によってウェブページの見やすさにすごい差があった。
- ・自治体のウェブの1位と5位の差は、こんなにあるなんてびっくりした。
- ・見にくい県は、今すぐ変えるべきだと思う。初めて見た人は絶対わからないと思う。
- ・埼玉県はダントツで見にくかった。
- ・やはり一番見やすい、調べやすい神奈川県が独占だったのは言うまでもなかった。

余談ですが、この当時1位だった宮城県と最下位だった宮崎県のアクセシビリティの差は、直感的な感じでも差があった記憶があります。例えば、ブラウザの表示幅を変えたり、画像を非表示にしたりしただけでかなり見にくくなってしまいました。しかしながら、JIS化されたためか、それぞれの県でアクセシビリティに配慮され、現在ではどの県も良くなったように思います。

(2) 画像の表示、非表示を切り換えて、アクセシビリティの違いを体験する

先ほどの、自治体サイト・アクセシビリティランキングにあるリンクから、各都道府県の自治体サイトをウェブブラウザで表示させます。その際、ブラウザで画像の表示、非表示を切り換えて、どのような差があるかを体験させます。Internet Explorerでも画像を非表示に設定することはできますが、いちいち設定を変えながら見ることは大変なので、画像を簡単に非表示にできるブラウザを利用しました(p.8参照)。また、Internet Explorer用のAccessibility Toolbarというものも使ってみました。これはかなり便利でした。

最近、自治体のウェブサイトはかなり良くなっ

ているようなのですが、画像がないと半分以上情報が得られないようなページも存在することに驚きます。また、公共性が高いと思われる、新聞社やテレビ局のサイトへのリンク集を作成して、同様に差を体験させました。

このような簡単な方法でも、高齢者や障害者などにとってアクセシビリティが高いかどうかは、おおよそ感じ取ることができます。

(3) キーボードだけで操作してみる

画像ばかりのウェブページは、視覚に障害がある人には情報を得にくいページであるだけでなく、マウスがないと操作できないといった問題も生じるときもあります。そこで、マウスを使った場合と、マウスを使わずキーボードだけで同じ操作をする場合とでどのくらいの差があるかを体験させてみました。

例えば、マウスでYahoo! JAPANにある千葉県柏市の天気予報のページを開くときには、

「天気」をクリック

「千葉」をクリック

「北西部(千葉)」をクリック

「柏市」をクリック

の、4回のクリックで開けますが、これをキーボードで操作したらどうでしょうか。

キーボードだけでウェブページのリンクをたどることは、ほとんどの生徒が初体験です。基本的には、Tabキーでリンクがはられている場所を移動して、Enterキーでリンクをたどるという操作になります。

先の柏市の天気予報のページを開く場合、キーボードだと全部で247回の操作でした。

「天気」まで移動 (Tabキー 17回)

リンクを開く (Enterキー 1回)

「千葉」まで移動 (Tabキー 118回)

リンクを開く (Enterキー 1回)

「北西部(千葉)」まで移動 (Tabキー 55回)

リンクを開く (Enterキー 1回)

「柏市」まで移動 (Tabキー 51回)

リンクを開く (Enterキー 1回)

(4) テキストブラウザで画面を表示してみる

Lynx という、画像を表示せず、テキストだけ

を表示するブラウザがあります(p.9参照)。画像を表示しない、テーブルをサポートしていない、といった特徴から、ウェブページのアクセシビリティ、特に音声読み上げのシミュレーションを視覚的に行えるツールとして活用することができます。キーボードからの操作に生徒は慣れないと思いますが、演示するだけでもキーボードで操作するというのとはどういうことなのかがよく分かります。普通のブラウザとは外観も異なりますので、アクセシビリティのイメージも伝わりやすい感じがします。

5. おわりに

ウェブページの作成というよりは、作成前のことを中心になってしまいましたが、ウェブページを作成する前に、ウェブページのしくみやアクセシビリティについて意識を持たせておくことは、その後の授業を進める上でも役に立つことであるし、また、大切なことであると思っています。

一部のウェブページを除けば、今、世の中にあるウェブページの多くは、アクセシビリティという言葉を知らない、または、知る方法もなかった人たちが、自分で本を読んだりしてウェブページの作成方法を学び、作られたものだと思います。このような状況を見ると、高校の「情報」の授業でアクセシビリティについて考えさせていくことは、大切なことなのではないかと思っています。

アクセシビリティについては、まだ取り組みをはじめたばかりで、考えなくてはならないことも多くありますが、これからも「情報」の授業の在り方を模索していきたいと思っています。

参考 URL

- ・ Web Content Accessibility Guidelines 1.0
<http://www.w3.org/TR/WAI-WEBCONTENT/>
- ・ ウェブコンテンツ・アクセシビリティ・ガイドライン 1.0 (日本語訳のページ)
<http://www.zspc.com/documents/wcag10/>
- ・ アクセシビリティ
<http://www.htmlhelp.com/ja/design/accessibility/>
- ・ 情報バリアフリーのための情報提供サイト: 情報通信研究機構 (NICT)
<http://www2.nict.go.jp/ts/barrierfree/index.html>

参考資料

画像を非表示にしてウェブページを見る方法
Internet Explorerで画像の非表示の設定をする
Internet Explorerでは、次のような方法で設定します。

- (1) 「ツール」 「インターネットオプション」を開く。
- (2) 「詳細設定」タブの「設定」の一番下の方にある「画像を表示する」のチェックをはずす。

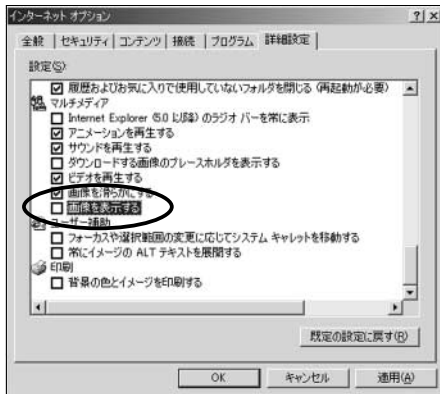


図1 Internet Explorerでの設定場所

このように、Internet Explorerでは、設定で画像を非表示にすることができますが、画像の表示、非表示を切り替えながらウェブページの状態を確認するのは面倒です。また、設定が変更できないように制限をかけてある場合には、この方法は使えません。かわりの方法として、画像の表示、非表示を簡単に切り替えることができるソフトウェアをいくつか紹介します。

画像を非表示にできるブラウザを利用する

- (1) Sleipnir (<http://sleipnir.pos.to/>)*¹

Sleipnir (スレイプニール)は、フリーで利用できるタブブラウザです。ステータスバー(右下)に、「画像の再生を切り替える」というアイコンがあり、これをクリックすることで、ウェブページ上の画像の表示、非表示を簡単に切り替えることができます。

「画像の再生を切り替える」アイコン



図2 Sleipnirのステータスバー



図3 Sleipnirで画像を非表示にした画面

- (2) Opera (<http://www.jp.opera.com/>)*²

Operaは多機能で高速なブラウザとして一部に熱心なユーザがいるブラウザです。いろいろな機能がショートカットキーに割り当てられていて、Shift + Iを押すことで、画像の表示、非表示を切り替えることができます。



図4 Operaの画面

*1) 最近、Sleipnir 2.00が公開されましたが、旧版の1.66でも十分です。インストーラー版と単なるzip圧縮版があります。いちいちインストーラーが面倒な場合でも、zipファイルを展開して、Sleipnir.exeを実行するだけでも起動しますので、私は、共有フォルダに展開したファイルをおいて、生徒にSleipnir.exeを実行させました。この場合でも「標準のブラウザに設定しますか」と聞いてくるところだけいいえ」にすれば、特に問題なく利用できると思います。

*2) 以前は無償で利用できるバージョンには、バナー広告が表示されていましたが、最近、ブラウザ内の広告バナーを取り外しライセンス料も不要になりました。

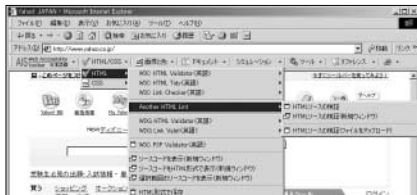
(3) Web Accessibility Toolbar 日本語版 *3

(<http://www.infoaxia.com/tools/wat/index.html>)

Web Accessibility Toolbarは、オーストラリアの視覚障害者団体が設立したNPOのNILSが開発したWindows版Internet Explorer用のツールバーです。ツールバーの中に画像の表示やCSSの有効に関する設定があり、ここをクリックするだけで表示を切り替えることができます。



(a) Internet Explorerの設定に関するメニュー



(b) HTML/CSSの検証に関するメニュー

図5 Accessibility Toolbar

ウェブページのアクセシビリティをチェックできるツール

(1) Lynx (<http://lynx-win32-pata.sourceforge.jp/>)

Lynxは、画像を表示せず、テキストだけを表示するブラウザです。現在のインターネット環境ではこのようなテキストブラウザの価値はないように思えるかもしれませんが、画像を表示しないこと、テーブルをサポートしていないこと等の特徴から、ウェブページのアクセシビリティをチェックするためのツールとして、特に音声読み上げのシミュレーションを視覚的に行えるツールとして活用できます。

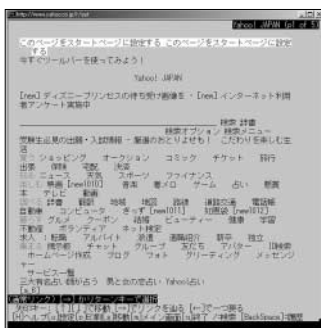


図6 Lynxで表示したYahoo! JAPAN

(2) WebInspector

(<http://design.fujitsu.com/jp/universal/assistance/>)

WebInspectorは、富士通が配布しているアクセシビリティ診断が可能なツールで、無償でダウンロードして使用することができます。ウェブコンテンツに関するJIS規格であるJIS X 8341-3に対応しています。

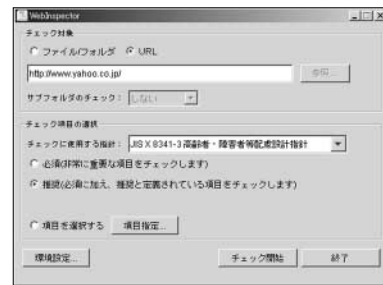


図7 WebInspectorの起動後の画面



図8 ウェブページのチェック結果の画面

*3) ウェブアクセシビリティの重要性に気づいてもらいたいという開発者の思いから、最もシェアの高いWindows版Internet Explorerのツールバーとして開発されたそうです。主な機能は、以下の通りです。

- ・W3C提供のHTML/CSSチェッカーによるソースコード診断
- ・CSSをオフにした画面表示
- ・画像をalt属性値(代替テキスト)に変換
- ・グレースケール表示に変換
- ・見出し箇所、リンク箇所を一覧表示
- ・テーブルのセル順序を表示、リニアライズ
- ・ブラウザ画面サイズのリサイズ
- ・ブラウザ画面内の拡大
- ・各種視覚障害の見え方をシミュレーション
- ・機種依存文字、半角カナの使用箇所チェック
- ・各種ツール、関連サイトへのリンク
- ・その他